

歴史点描 15 船渡八幡神社 1

船渡八幡神社の創建は定かではないが、江戸時代の年号である宝暦9年（1759）・文化4年（1807）の年号が刻まれたご神燈や安政4年（1857）・文久2年（1862）の年号の玉垣等から江戸時代に遡ると思う。江戸時代、龍野藩・丸亀藩・幕府領に分割統治されていた揖保川河口の町網干は、揖保川の舟運と瀬戸内海の内海運の物流の拠点として大いに栄えた。その繁栄の時代に網干に寺社が増えたと言われる。河口の余子浜の網干湊の堤防の上にあり、南の堀川に廻船問屋の船が数多く係留し賑わっていた時代の面影が今も残る船渡八幡神社、当時船や旅人を守る道祖神への信仰は厚く、村や国の境に祀られたようだ。船戸は道祖神であり猿田彦明神を祀る。また、船渡八幡神社は魚吹八幡神社の若宮である、と言われると頷ける。まず一つに、神功皇后・応神天皇と御祭神が一致している。二つ目は魚吹八幡神社も風土記の時代、南が海であったと思われる。それゆえか魚吹八幡神社も船渡八幡神社も拝殿の正面の瓦は龍神である。また、拝殿前のご神燈のほかに大きな常夜灯がある。当初、堤防の上にあり、材木商・薪炭商等が設置したと言われる。常夜灯の灯りは揖保川から堀川へ船舶を導くための重要な明かりだった。境内の改修時、常夜灯を後世に残すため奉納設置された。ちなみに常夜灯は文久壬戌の年号が刻まれている。そして、魚吹八幡神社の門の南にも大きな常夜灯がある。三つ目に網干で、千燈祭があるのは魚吹八幡神社と船渡八幡神社である。今も、魚吹八幡神社は千の灯をともし安全を祈る。若宮さんの千燈祭は自治会が一つになって人々の弥栄（いやさか）を祈り、境内で歌い踊る交流の行事として伝承されている。祭りの記念に自治会が一本ずつ植えた桜が毎春見事に咲き誇り網干の人々を魅了している。

歴史講座会員 大脇和代



常夜灯（文久壬戌年（1862））



千燈祭（令和4年7月16日）